

社会科教育

奈良県小学校教科等研究会
社会科部会
第76号



井陽介先生 (全体会)

「自分の学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」を大会主題とし、全国大会並びに第64回近畿小学校社会科教育研究協議会、第64回奈良県小学校社会科研究大会が三会場で開催されました。

新学習指導要領の告示後、最初に行われる全国大会に全国からたくさんの方に参加いただくことができました。また、指導講師・指導助言の先生方からも指導をいただき研修を深めることができました。

指導講師
文部科学省初等中等教育局
視学官 澤井 陽介 先生

第55回全国小学校社会科研究協議会研究大会
奈良大会
平成29年10月26・27日



① 「知識及び技能」
「社会的事象の意味に関する情報を、集めて読み取って、まとめる技能」です。② 「思考力、判断力、表現力等」
「五・六年生から「多角的に考える」ということを書いています。もう一つは、「選択・判断をする力」です。これは、未来を生きる子供たちにとって必要な力です。

社会に開かれた教育課程の実現。先陣を切ってそこに向かうのは、社会科であるという事です。子供たちの学びが社会につながる。学んだことを生かして社会に近づくという意味合いです。

③ 「学びに向かう力、人間性」
学年目標の、主体的に学習の問題を解決しようとする態度。つまり、学習中に見られるより良い社会を考え、学習した事を社会生活に生かそうとする態度。学習の終末や学習後に見られる態度。このように評価を想定して描いています。

切り離されないような書き方になっています。「〇〇を理解して知識を身に付ける」「〇〇を調べて、まとめる技能を身に付ける」「考えを表現して、思考力・表現力・判断力を身に付ける」。それらに、問題解決的な学習の中で取り組むと書かれています。

授業改善・授業作りのポイント
① 自分の授業を普通で考え、そこに対話的・時間的な視点などを足し算で考えて下さい。
② 社会科の授業を、一から作り直すわけではありせん。今ある授業をより社会科らしく、「主体的・対話的で深い学び」を実現するために、何が必要かを見極め、単元や題材などの長いスパンで実践するということが、総則の中に描かれています。

「選択・判断」
学んだことを活かして、子供たちが実社会に近づく場面です。

「知識の質を高める」
概念等に関わる知識。小学校では「社会的事象の特色や意味に関わる知識」と言えはいいでしょうか。これも、「〇〇は、〇〇であること」を理解する」という形式で書かれています。

「問い」の重要性
「問い」を重視し、事実の関連づけのみならず、子供が互いの考えを比較・関連付け・総合しながら共通点や相違点を見いだし、互いの知識を更新しながら概念などに関わる知識を獲得できるようにしている。

三・四年生では、「自分たちでできること」ですが、高学年では、それらは少なくなります。代わりに出てくるのが「多角的に考える」という言葉です。この言葉は歴史的分野で使われ、立場を指す場合が多いです。ある物事を、様々な角度から検討すること、様々な立場や意見を踏まえて考えることを多角的と言ってきました。

奈良大会の提案について
奈良県の教材化
教材や指導計画の中に描かれている。

子供が「見方・考え方を働かせる」ための授業改善

- ①教材化の工夫
「見方・考え方を働かせる」ための授業改善として、教科書や教材の特色や事例などを教材化する。
- ②問題解決的な学習の展開(過程)の工夫
「問い」の構成の工夫
「問い」の構成の工夫
「問い」の構成の工夫

第一会場
奈良市立飛鳥小学校

よりよい自分と社会を
創るために、学び合い
高め合う児童の育成
「持続可能な社会」を
考える社会科学習を通して

「よりよい自分と社会を創る」ために

社会には様々な立場の人々があり、それぞれの考えをもっている。そんな様々な人との関わりの中で、「どこが違うのか」「どう違うのだろうか」と自分に問い直し、「このままで本当によいのだろうか」「もっとよい社会にするためには」と、自分の価値観や行動を批判的に考える。この思考の繰り返しが、めまぐるしく変化する現代社会において、よりよい自分と社会を創っていくとする態度や行動につながるであろう。そのため一人一人が確かな見方・考え方を働かせて、よりよい社会づくりを目指す人間になってほしいと考える。

「学び合い高め合う児童」の姿とは
学級などの集団の中で、自分の考えを積極的に出し、互いの考えを聞きあったり、質問したり意見を交わすことで、それまで気付かなかった見方や考え方に気付く、大きく考えを変えたり、修正したり、深めたりすることができ、このような多角的な思考を繰り返すことで、確かな見方・考え方で社会的現象を捉える力が養われていく。

○奈良大会の主題とのかかわり
「よりよい社会の形成」とは、「持続可能な開発」の概念に通ずる。したがってESDの視点で授業を構築していくことは、有効な手段であると考える。新学習指導要領において求められている「協働的な問題解決学習の充実」は、自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的・協働的に探究し、学びの成果等を表現し、実践に生かしていきけるようにする「ESD的学び」の必要性和合致する。

○研究の視点
①教材について
本校の周りには、奈良の魅力な自然・人・社会・文化といった地域の題材を教材化することで、児童は「自分事」として捉えながら学習を進め、より主体的な学びが期待できる。六年生の「わたしたちの生活と政治」の学習では、地域のイベントである奈良燈花会を切り口に、観光客に向けて実施している地方公共団体の取組を見つめることにより、地方公共団体は市民の願いを実現させるために様々な事業を行っていることを考えさせることができた。

②ねり合いについて
ねり合いとは、「事実」に依拠した児童相互の話し合いを行う中で、見方・考え方を働かせ、中心概念に迫る学習である。ねり合いによって「新たな考えに気付く・考えが広がる・考えが確かなものになる・考えが更新される・考えが深まる」対話的な学習である。このようなねり合いを通して中心概念に迫る学習プロセスは、まさに「ESDの問題解決プロセス」

と言え。四年生の「命とくらしをささえる水」では、「これからの生活でみんなは水道水を飲みますか？」というテーマでねり合った。児童は個々にこれまでに学習した様々な事実を関連付けて考えを交流したことで、「企業局の人們が計画的に水道水を作り、送水したり、点検したりすることで、生活の維持・向上に不可欠な安心・安全な水が利用できる。また、水は限りある資源であり、私たちは水を大切に使用していかなければならない。」という中心概念に迫ることができた。

③よりよい自分と社会を
求める姿について
よりよい社会の姿を具体的にイメージし、それまでの価値観や行動を変革させるために、中心概念の獲得で授業を終わるのではなく、「ひろげる」段階において、「だからわたしたちはどうするのか」「何をしなければならぬのか」「何をしたいいけないのか」という新たな問いをもち、主体的に選択・判断し、行動していけるような学習を組み入れた。ESDの学びを通じて、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度を育み、持続可能な社会の構築に貢献するという「ESD的価値観と行動」を育てていきたい。中心概念の獲得に至るまでの学習で明らかになった様々な課題については、「Think globally、Act locally」というESDの考えに沿って、「実現可能なことから一人一人が行動できるような学習を創出していく。」

指導講師
奈良教育大学名誉教授
福山市立大学名誉教授
田淵 五十生 先生

○飛鳥小学校の取り組みについて
地域に特対すれば、地域には「ひと・もの・こと」という教育力がある。地域を教材化することで、地域を突き抜けてグローバルな地平に到達することができる。また、「学び」とは一人ですぶものではなく、仲間と一緒にそれぞれの立場から、事実即して意見をぶつけ合う中で、深い学びになり、新しい知識が構成される。あたり前をあたり前と捉えないこと、もう一度対象化し、考え直すことそれが社会科であり、ESD的な学習である。ESDは新しい教育ではなく、「どんな未来をつくるのか」という視点を取り入れることで、今までの教育に、より社会科が児童にとって切実感をもつようになる。

○持続可能な社会(ESD)について
現代社会は残念ながら持続可能(sustainable)であるとは言えない。地球温暖化によって、北極の水が溶け、ホッキョクグマの赤ちゃんが氷から落ちて死んでしまうことも。また、海面が上昇し、ツバル諸島が沈没してしまうことも。海面上昇による影響は日本にも。広島では太田川に海水が逆流してきたことにより、シジミの漁獲量が30分の1にまで減少した。二酸化炭素の排出量については、中国アメリカ、インドを筆頭に、日本や韓国も上位に位置している。これはわたしたち自身のライフスタ

イルの変化(大量生産、大量消費、大量廃棄)が大きく影響している。生態系の問題も深刻である。日本のトキは農業によって生態系が崩れてしまい、絶滅してしまった。ミツバチも絶滅危惧種の一つになろうとしている。それほど地球の生態系は脆弱である。けれどもそれらの事実には我々は気付いていない。そういった、たくさんの地球諸課題に対して、時間的、空間的、社会的なつながりの回復を求める意図的な教育がESDである。国際連合の総会で「持続可能な開発目標(SDG)」が採択され、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して経済・社会・環境をめぐる広範な課題に、総合的に取り組むことを全ての関係者(先進国、途上国、民間企業、学校等)に呼びかけた。

○最後に
南米アンデス地方に伝わる「ハチドリ」のひとしずく」という物語がある。山火事で必死に逃げ惑う動物たちの中、一羽のハチドリが雪を一滴ずつ運んでは火の上に落としていく。「そんなことをして、いったい何になるんだ？」と問うと、ハチドリは言った。「私は私のできることをしているだけです」。奈良の東大寺の大仏様の再建は、このハチドリと同じ志を持った人々の行動(善捨)によって実現された。再建を呼びかけたお坊さん、それに応えた人々によって、守られ、受け継がれてきたのである。ハチドリの健気な行動力やお坊さんに応えた「志をもった人々」のような人格を育てていくことが私たち教育者の使命ではないでしょうか。

第二会場
奈良市富雄第三小中学校

豊かな心を持ち、生き生きと
学び合う児童・生徒の育成
聴き合い つながり合い
学び合う授業の創造

小・中学部共に、「学び」を中
心に「聴き合う」授業の研究を行
い、お互いの信頼を高め、自尊感
情を育み、学習への積極性を育て
ようと取り組んできました。

また、生徒たちが社会人として
必要な能力を備えることができる
よう、どのような能力が求められる
のかを整理し、「富三キャリア
教育指標」として設定し、教育活
動に活用してきた。この指標を意
識しながら社会科、特に「ねり合
い」の中でどのように力を育むこ
とができるのかを研究してきた。

- ① 「ねり合い」で育てたい力
「問題発見の力」
問題を自分事として見つける
力である。
- ② 「推測する力」
根拠を他者の根拠とつなぎ、
類似性のある事象を足掛けと
することで、新たな推測を促
す力
- ③ 「情報を収集し活用する力」
収集した情報を読み取り自分
なりにまとめる。情報の交流
を通してさらに自分の意見を
まとめて確かな根拠にする。

必要に応じてその情報を使う
ことができる。

- ④ 「協働的に問題を解決する力」
話し合いを一面で集約的な方向
に向かわせる力ではなく、協
働することで多面的・多角的
な見方・考え方を出し合い、
問題を解決していく力。
- ⑤ 「自身と社会を結び付ける力」
社会に参画する力。

これらの力を身に付けた児童は

- ① 新たな考えに気付く
- ② 考えが広がる
- ③ 考えが確かなものになる
- ④ 考えが更新される

などの変容がもたらされるを期待
している。必ずしも児童の考えが
全く違うものにも変わることが求め
るのではなく、より考えが確固た
るものになるというのも一つの児
童の変容と捉えている。

- 「ねり合い」を生む手立て
- ① 「調べる活動の充実」
- ② 「問いや対話でゆさぶる」
- ③ 「教材を精選する」
- ④ 「予想と学習計画」
- ⑤ 「学んだことを生かす」
- ⑥ 「振り返りの活用」

今年度は特に①⑥について重点
的に取り組んでいる。

- ① 「調べる活動の充実」
「ねり合い」には、既有的知識
や経験だけでなく、客観的な資料
が必要だからである。感情やその
時の気分が変わるような意見では
なく、明確な理由をもつことを求
めている。そのため、わかっ
たつもりになっていないことを明らか
にすることで、「調べ直し」の活
動を取り入れるようにしている。

学習を進める中で当初は気付か
なかった質的に高まった問いが生
まることがある。こうした問いに
向き合わせることで、それまでの
考えが揺さぶられ、質の高いねり
合いが生まれると考えている。

- ⑥ 「問いや対話によるゆさぶり」
このような機会を意識的に取り
入れていくための手立てである。
学習問題だけでなく、ねり合いの
問いを効果的に位置付け、それま
では気づかなかった新たな視点、
多角的な視点で社会的事象を見る
ことができるようにしている。

指導講評
國學院大學教授
安野 功 先生

本日の授業について
○根拠をもとに考える授業
・六年生の授業は、しっかりと「社
会科教育」になっていた。

例えば社会科の授業では、めあ
ては内容的なことを書くことが多
い。しかし、今日の授業では「自
分の根拠をもち、なぜ対立したの
か自分の考えで表明する」になっ
ていた。社会科の教科の特質から
どのような資質・能力を身に付け
させるのかという点を授業で大
切にしていた。内容的には、大
変難しいテーマだったが、子供が
そのめあてに向かっていたという
う姿が見事に初めから見えていた。
ある子供が後ろに掲示してある
これまでの学習をまとめた紙を指
して、「ここからこういうことが
言えるんです。」「ここが大切な
です。」と言っていた。これは根
拠をもって言えたと言えし、子供
が自分の考えとして表現できてい

ると言える。根拠があるという自
信が、子供の発言の語尾に出てき
ていた。

○子供の思考を深めるために
・次に、子供たちが社会的事象を
見る目、疑問についてどう考えて
いるのかは、ノートを見れば一目
瞭然である。ノートの中に、疑問
矛盾、解決がどのように込められ
ているか。それを教師が、「あな
たの疑問はともよく考えられて
います。これから追究していきま
いですね。」と、褒めているのか
拾っているのが大切だ。

ある四年生のノートを見ると、
ふり返りの中で、「音楽やパレー
ドで火災を防ごうと呼びかけてい
る。そうすることで火災が減った
から続けているのかな。」と書か
れていた。音楽隊の活動が火災を
減らすために続けていると話し合
いが進んでいたようだ。それを本
当に減るのか調べ直しをするの
ではなく、本当にそうなのかと考
えることが社会科の原点である。そ
の姿が子供たちから出てきている
のだが、主体的な学びを見ること
につながる。

○問いを育てる
・今日のねり合いの問いも唐突に
出てきたものではなく、子供から
出てきたものだからになった。ま
さに主体的な学びとなっていた。
ここで大切なのは、先生が問いを
育てていることだ。主体的な学
び、対話を生む問いを作ること
は簡単ではない。いろいろなクラス
のノートを見せてもらいましたが、
どのノートにも克明に赤が入って
いた。まじめについても子供た
ちはねり合いの中から「そうだな、

そう言えそうだな。」「なんか違
いそうだな。」というところを聞き
分けていた。その姿が聴き合うと
いうことであり、教科が社会科教
育になっていたと言え。

○聴き合い、学び合う授業
富雄第三小中学校の授業で、何
を一番大事にしているか、それは
先生が子供一人一人の最後の声ま
で聞こうとしているところだ。ど
うしてこの学校でできるのか考
えてみると、二点見つけることが
できた。

一つ目は、社会科という一教科
だけで子供を育てようと考えてい
ない点。めあてを含めて、聴き合
い、ねり合いをいろいろな教科の
中でもやっていることだ。

もう一つは、小中一貫校として
の特色でもあるが、社会科におけ
る豊富な知識や難しい概念の形成
は中学校で培うことができるので、
小学校の間からあまり急いでいな
いということだ。

○最後に
まとめとして、現在学習指導要
領の改訂で主体的、対話的で深い
学びということが言われている。
その中で、どういった深い学びに
していくのか議論を重ねていく必
要がある。その点を明確にしてお
かなければ、活動しているだけだ
ととられかねない。その部分を授
業研で吟味していただきたい。た
だ、プロセスの中で、主体的に対
話的に学んでいくという点は、こ
の学校の先生方が見えないところ
で、きめ細やかな指導をされてい
ることは見て取れたと考えている。
今日は、富雄第三小中学校の教育
が展開されたことが一番うれしく
思っている。

第二会場
大和郡山市立筒井小学校

自ら考え、生き生きと
活動する子どもの育成
社会を見つめ、追求する力を
はぐくむ社会科学習

「社会をみつめる」とは

「人・もの・こと」に象徴される社会的現象を漫然と眺めるのではなく、自分事として凝視することである。

・意外性や驚きがあり、さまざまな疑問が湧き起こる教材と出会うこと。

・多様な意見・疑問を集約し、解決すべきみんなの問題だと意識すること。

・学習問題をつくると同時に予想や解決への見通しをもつこと。

・学習問題を絶えず意識しながら学習に取り組むこと。

筒井小学校では、研究主題に迫るために次の五つに取り組んでいる。

- ①興味を持続し、思考が深まる教材の開発
- ②自分との関わりを見いだせる教材を用いると、人の営みやその中にある願いや思い等も学ぶことができる。
- ③四年生(水の学習)
- ④浄水場ではたらく人の聞き取りなどから人の営みについて考えた。
- ⑤学習のねらいに迫ることのできる学習問題の設定

既知の知識や経験で説明できない場面に出会うと「どうしてだろう」などの疑問が生まれ、それを予想することから解決したいという学習問題へとつながっていく。

⑤質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。

③思考を深める話し合い活動の工夫
話し合い活動の目的・視点・方法を明確にし、ペア・小集団・学級など話し合いの形態も工夫した。自分の考えを比較、関連、総合させる話し合いに高めていけるようにした。

②二年生(野菜を育てる学習)
一人一人の探求を進める中で、困りごとが出てきた。それらを交流することで、友達の困りごとを自分事として考えることができた。

④対象に対して一人一人が働きかけることのできる学習活動の設定
子供が興味をもった対象に主体的に活動ができるよう、子供と対象(人・社会・自然)との出会わせ方、また活動や体験の場・環境を整えることを大切にしたい。

③話し合い活動の目的・視点・方法を明確にし、ペア・小集団・学級など話し合いの形態も工夫した。自分の考えを比較、関連、総合させる話し合いに高めていけるようにした。

②一年生(一粒のたねの学習)
二年生が保管して育てていた種を使い、子供が自ら種を育てることのできる環境を整備した。愛着をもったり、主体的に活動したりすることができるような課題を設定した。

④話し合い活動の目的・視点・方法を明確にし、ペア・小集団・学級など話し合いの形態も工夫した。自分の考えを比較、関連、総合させる話し合いに高めていけるようにした。

①興味を持続し、思考が深まる教材の開発

①興味を持続し、思考が深まる教材の開発

②自分との関わりを見いだせる教材を用いると、人の営みやその中にある願いや思い等も学ぶことができる。

②自分との関わりを見いだせる教材を用いると、人の営みやその中にある願いや思い等も学ぶことができる。

③四年生(水の学習)

③四年生(水の学習)

④浄水場ではたらく人の聞き取りなどから人の営みについて考えた。

④浄水場ではたらく人の聞き取りなどから人の営みについて考えた。

⑤学習のねらいに迫ることのできる学習問題の設定

⑤学習のねらいに迫ることのできる学習問題の設定

⑤質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。

⑤質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。

指導講師
国立大学教授 北 俊夫 先生

とが、自己の生き方を考えることにもつながる。社会科学という教科の役割を考えたとき、人物に対する共感のみにとどまらず、社会とどう関わるかという視点をもてるようにしていきたい。

①次期学習指導要領への移行について
社会科学については平成30年度から全部または一部について、新学習指導要領によることができる。現行学習指導要領による場合は、一部を追加することができる。これは、三つの選択肢からいずれを選択するかを学校に求めている。本年度の計画のままでは使えない学年が出てくる。また、移行期間に配布される教科書は現行指導要領に基づくものである。このズレをどう考えていくのか社会科学においては問題となってくる。追加された教材や事例については、新たな教材開発が必要となってくる。また、来年度から総則については全面実施しなさいと捉えることができる。総則は指導要領の要と言われている。指導方針に課題が向きがちであるが、どう指導するかの前に、なぜいまこれが求められているのかということ、その目的は何かについて考えてほしい。

②話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

②話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

③思考を深める
話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

③思考を深める
話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

④対象に対して一人一人が働きかけることのできる学習活動の設定
子供が興味をもった対象に主体的に活動ができるよう、子供と対象(人・社会・自然)との出会わせ方、また活動や体験の場・環境を整えることを大切にしたい。

④対象に対して一人一人が働きかけることのできる学習活動の設定
子供が興味をもった対象に主体的に活動ができるよう、子供と対象(人・社会・自然)との出会わせ方、また活動や体験の場・環境を整えることを大切にしたい。

⑤質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。

⑤質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。

⑥教材の開発について
教材の捉え方としては、教材そのものを学ばせるだけで終わらせるのではなく、学習していくための材料として考えていく。教材を通して何を学ばせるのかをしっかりとおさえることが大事ではないか。教材開発には人の営みを関連付けることが大切である。教材に人物を登場させることにより、子供たちは興味関心をもち、人物のはたらきに共感すること

⑥教材の開発について
教材の捉え方としては、教材そのものを学ばせるだけで終わらせるのではなく、学習していくための材料として考えていく。教材を通して何を学ばせるのかをしっかりとおさえることが大事ではないか。教材開発には人の営みを関連付けることが大切である。教材に人物を登場させることにより、子供たちは興味関心をもち、人物のはたらきに共感すること

⑦話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

⑦話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

⑧思考を深める
話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

⑧思考を深める
話し合い活動の工夫について
友達の考えを聞いて自分の考えを深めることができる。個人レベルの思考の深まりにつながる。友達の多様な考えを基にして、より良い考えをつくることのできる、協同的で創造的な活動になっている。

⑨対象に対して一人一人が働きかけることのできる学習活動の設定
子供が興味をもった対象に主体的に活動ができるよう、子供と対象(人・社会・自然)との出会わせ方、また活動や体験の場・環境を整えることを大切にしたい。

⑨対象に対して一人一人が働きかけることのできる学習活動の設定
子供が興味をもった対象に主体的に活動ができるよう、子供と対象(人・社会・自然)との出会わせ方、また活動や体験の場・環境を整えることを大切にしたい。

⑩質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。

⑩質の高い気づきにつながる伝え合い活動の工夫
体験や調べたことを伝え合う中で友だちと気付きを比べ、違いを見つめたり、疑問をもったりする。そのため学習形態、発問・声掛け、ワークシートの工夫などを行った。